子供のことば
「おにむしの話」

小山　清

一

広島から芸備線にのって、五時間ほどたつと、東城という町をすぎて、岡山県にはいります。その岡山県にはいったところが、わたくしの在所であって、世間には「岡山県阿哲西町」という名で通用しています。何のへんてつもない、山の中にたんぼが少々ばらまかれているだけなのに、人間が住み、ことばが話されているから不思議です。

このわたくしの在所で、くわがた虫のことを「おにむし」と呼んでいます。どうしてそう呼ぶのか、はっきりしたことは知りませんが、その形の尋常でないものをもって、「おに」という接頭語を冠したのでしょう。

今、広辞苑（新村出編・岩波書店）で、「くわがたむし」をひいてみますと、次のような説明がしてあります。「鞘翅目くわがたむし科の昆虫。体はやや平たく、頭部大きく、雄の顎は異常に発達して鍬形状を呈する。ナミクワガタ・ノコギリクワガタ・ミヤマクワガタなどあって、鍬形のかたち、体長など異なる。クヌギ・ナラ・ヤナギなどの樹液を好む。別称、さいかち、さいかちむし。」

ここで『くわがた』というのは、雄の異常に発達した顎が、兜の前立物の一つで、眉庇の上から角のように、左右へ二本出ているのに似ているからといわれたり、鍬の形（備中鍬といって股間のある鍬）に似ているからといわれていますけれど、今は「おにむしの話」なので、くわしくふれないでおきます。

二

わたくしたち村の子どもは、このおに虫をつかまえに、七月の声をきくと、朝露をかきわけて山へいったものです。そして、小鳥の声だけがきこえる静かな空気のひろがりの中で木をゆすり、ポタリという音がしたときの心のときめきは、誰もが忘れられないでいるにちがいありません。つかまえたおに虫は、土俵をこしらえてすもうをとらすのです。背中をポンとたたくと、角をふり立てて相手にむかって突進していくのを、むしょうに喜んでいたわけです。そのためカバンの底やポケットの中にひそませて、学校へもっていくこともあり、自分のおに虫は、まるでおかかえ力士のようにかわいがっていたのを思い出すと、愉快になってきます。

一般的にいって、私たちの幼い頃をはぐくんでくれた無数の自然、虫や小鳥や草の花など、ただ口にしないというだけであって、たいていは、今も覚えている遊戯とか、これに伴う唱え言の中に生きています。それもただの名称だけでなく、必ずこれを活躍させた感動というものがくっついていることも確かでしょう。

このことは、現在、わが国で方言の種類の多いのが、子供たちの遊び相手である草や虫、または小魚などに限られていることにも関係があるのかもしれません。

三

この「おにむし」というのは総称であって、実際には、その形によって、いろいろの名前でよんでいました。つまり、「かぶと」とか「おなみつ」「のこぎり」「めんつう」というぐあいに。

「かぶと」というのは、ミヤマクワガタの雄のことで、角（顎の発達したもの）の形が兜に似ているので、そうよんだのでしょう。「おなみ」にくらべて、頭部がごつごしており、角の先が二つにわかれていることも、よけい兜に似ているわけです。

このように、形の似たものの名前を借りてくるというのは、音や色と共に、子供の言葉づくりの根本的な姿勢だと思われます。例えば、酒を「アツカ」というのは、顔や手の赤くなるのを率直にさしたものであり、関東地方で「オトト」といったりするのは、杯を受けて注いでもらう人の発する声を写生したものでしょう。形の似たものを借りてくるのでは、きのこの一種で、上が細く別れているのを、ねずみの手にたとえて「ねずで」といっているのは、このきのこを探すのが、子どもの専売特許になっている点などからして子供のつくったことばだと思います。なお、糸取り（綾取り）や折り紙につけられた名前を思い出せば、よけいはっきりしてきます。

それにしても、なぜ本来の「かぶとむし」（鞘翅目こねがむし科）が、くわがた虫に、「かぶと」というりっぱな名前を奪われたかということです。この本来のかぶと虫は、角が一本しかなく、そこに糸をくくりつけて、マッチ箱をひっぱらす程度で、すもうをとらないがために、子どもたちの興味の対象となり得なかったのでしょう。「かぶとし」という名前をなくしたかぶと虫は、「すくもむし」という妙な名でよばれ、すくもむしは「じむし」とよばれています。いってみれば、子どもたちが自分のつごうのいいように、再構成したにちがいありません。

四

「おなみつ」というのは、ノコギリクワガタの雄にあたり、角が「かぶと」にくらべると、下方にわん曲しています。私の在所は中国山地で牛の放牧がおこなわれており、たんぼの力仕事にも不可欠であるせいか、馬はすべて馬であるのに対して牛は雄牛を「こってい」雌牛を「おなみ」仔牛を「べっち」と使いわけています。そして、雌牛、すなわち「おなみ」の角と、のこぎりくわがたの角が、ひじょうによく似ているということです。

しかし、いくら似ているからといって、牛の角と虫の角をいっしょにしてしまうということは、大人にはとうてい考えつかないことでして、これはどうしても子どもがつけた名前でなければなりません。静岡県の浜名湖のあたりで、羅漢松の実のことを「ヤンゾウコウゾウ」というのも、鮮紅色の肉が深緑の種果の上に重なっているのを、幼児が人の背に負われているのにみたてたのでしょう。このように、形の大小を念頭に入れないで、奇抜な連想を働かすのは、おとなにはちょっとまねのできない芸当です。

「のこぎり」というのがいますが、これはまだ「おなみつ」になりきらないノコギリクワガタの雄のことで、角はわん曲せずまっすぐです。正式の名前にノコギリとあるように、のこぎりに似ています。おなみつと生物学的には同じ種族であっても、形が異なるゆえをもって区別してよぶのは、ボラという魚をその大きさに応じて、スバリ・イナボラ・トドというのと同じ発想でしょう。

五

「めんつう」というのは、ミヤマクワガタとノコギリクワガタの雌のことで、どちらも顎の発達が十分でなく、足にかみつくのが精いっぱいという程度でちょっと見たのでは見分けがつきません。これは異なった種類のものであっても、形が似ていれば、一つの名前で足りているということで、先の「おなみつ」と

「のこぎり」のちょうど逆の関係になろうかと思います。

なぜ「めんつう」というかということですが、角の形からは、それが貧弱なだけに、その理由がみつかりません。ここで私の頭に浮んだことは、男のことを「おんつう」女のことを「めんつう」ということです。誰かが生物学的に、雌ということを知っていたのではなくて、「かぶと」や「おなみつ」が堂々たる角をもって男らしいのに対して、女らしいと感じたからでしょう。

一つだけ蛇足をつけ加えておきますと、おに虫をつかまえにいき、木をゆすってポタリと音がしたとき、「くりけむし」即ち「くすさん」の幼虫が落ちてくることがよくあります。そんな時は、たいていがっかりして、ふみつぶしてしまうのですが、その「くりけむし」のまゆのことを、わたくしたちは「つんつくろう」とよんでいました。網の目になったまゆで、正式には「すかしだわら」というようです。

なぜ「つんつくろう」といったかは別問題にして、最近ではこれを「びびっちょ」といっているようです。子供たちが狭い仲間だけでこしらえて通用させた「つんつくろう」ということばが、他によいものがなくて、おとなの世界にも通用するようになったので、新しいのをつくったのかもしれません。とにかく文字の支配する領域の内と外のちがいです。

六

だいたいにおいて、新しい単語や句法は、多く共同の遊戯の場から発生してくるもののようです。そして、才能ある一人の考案というよりも、群の誰ともしれないもの、ことばをかえていえば、模倣というより承認がこれをひろめていくようです。鬼ごっこ、ままごと、石けり、草履かくし、お手玉その他、思い出してみますと、群の力がいかに大きいかがわかってきます。柳田国男さんのことばを借りていえば、遊戯は子どもたちにとって、大切な国語教育なのです。子どもの群は思うことと最も近い言葉生活をしているのであり、船や一軒家に育った子どもは悲劇です。

「我々の家庭に小児がおらぬと淋しいように、子供の言葉が交っていなかったら国語はあるいはもう少し几帳面な、愛敬の乏しいものになっていたかもしれません。今日の国語学者の取扱わない問題が、現実の国語界にまだ幾らでも残っているのも、小児の言語生活を省みなかった結果としか思われません。」

（柳田国男〈子供と言葉〉）

（本学学生四年）